

奥村兄弟の最大幸福と最大の不始末。

僕は悪魔になった（正しくは覚醒してしまった）兄さんと一緒に暮らしている。

「ゆきちゃん、あのね」

僕は実際、焦らせたたりするつもりはないのだけど、しえみさんは急いたように口を動かす。懸命に話をしようとして、そして出てくるのはころんとした、やわらかな声だった。

「昨日のだけど、お店のお使いに行ったらとても速い鳥を見たの」
どこで、と兄さんが問い、鳥や雀でもなくて？ と僕が問う。するとしえみさんは校舎の方を指差し、あつちからね、と続けた。

「駅の方に向かって、大きな影が横をね、さっと飛んでいつてびつくりしちゃって……」鳥よりも大きかったと思うなあ。

「襲われたりしたのか？」

兄さんの問いにぶるぶると首を横に振ると、違うよ、そうじゃないの、ともどかしいように言った。

「速すぎて形もはっきりしなかったからよく分からないけど……。帰ってきたからもう夜だったし、そういう悪魔がいたらって」

「どっちにしろ、夜の一人歩きなんか危ねえだろ」

兄さんは試験に向けて詰め込んで詰め込んで詰め込まなきゃならないことが多いから、その合間に見る料理の本が心のオアシスみたいなものなのだろう、レシピ集を手に結構真剣な顔でひとり哘の上を歩い

ている。風に制服のネクタイがはためいていた。ネクタイは教えなくても結べていた、聞いてないけど誰かに習ったのだろうか。

「二ーちゃんがいるから。それにゆきちゃんだって！」

「はは……」常にはいないけど護符の役目くらいにはなるかもしれない。「それにお得意様のところだし」

家の商いからいって客は魔を祓える者と考えていいだろう、しえみさんは昨夜は仕方がなかったのだ、と訴えるような眼差しを前方の兄さんに向け、それから僕を見た。

「この間の授業で二つ以上のかぎ爪状の魔障というのをやったから」

「ああ」

確かに。実戦参加が認められるようになれば、授業もより実際的になる、特に彼女は手騎士の才があり、使い魔である緑男（の幼生）に植物や生薬を出現させることができた。

「動物寄生の悪魔ですね。処置が複雑になる」

動物であることに加えて、魔であるということだ。死骸に憑依したものと似ているが、違う。むしろ凶暴化するのが殆どだから生物兵器といった方がいいかもしれない。そんなのに傷をつけられれば血も流れもするが、闇のものに咬まれてもいる、処置を誤り、どちらかを疎かにしてしまうととんでもないことになってしまう。蜂の針の刺し傷は皮膚消毒や針をとることで処することができるが、アレルギーに關して失念すると重篤な症状を引き起こしてしまうのと同じだ。生物だからこそその厄介さは授業で触れてはいるが、ひとには魔の瘴気の方がよりダメージが大きい。

「知っていれば役に立てるだろうし！」

意気込みは買うが、残念と言ったらいいのか、僕にはそのような情

報も被害の報告も入ってきていない。

「いまの話聞いただけでは断言できませんが、大丈夫だと思えますよ」

どちらかというど頻発しているのはグリモアの乱用——素人が悪戯に悪魔を召喚し、使役出来ず返り討ちに遭うというものだった。聞きかじりだけの知識で降魔の陣を描き、半端な知識と素地があったばかりに出たそれを御すことも出来ず、攻撃される。信州で一件、東海で一件、そして関東圏で二件、いづれもこの三ヶ月の間に起こっている。

「授業でやったように属性によって魔障も違ってはきますが、基本的に皮膚の爛れや出血など外傷の手当に加え、聖水での消毒や魔除薬で処置できます」牛薬ならばしえみさんも詳しいですね。

そう言うど兄さんはけつと吐き出し、しえみさんは顔を真つ赤にした。——どちらかというど彼女の使い魔の方がにこにこ——笑った。

「度合いや進行にもよりますが、動物に寄生する悪魔はどちらかというど下級の部類ではあります」それでも相当数に群れられるど大変だったりする。

「まあ、ここは境界内のようなものだから、中級以上は出ないと思えますよ。もし遭遇したら迂闊に手を下ささないこと」

出さない限りは出ない、ということであつて、稀に出る。魔除けをかいくぐつて彷徨い出てきたのでないとしたら導かれて出たと言うことには他ならない。実力があるとしてもまだ経験の浅い候補生に捨て身の実戦などをやらせるわけにはいかない。抜き打ちの試験だつてあらゆる意味でハラハラしたのだ、とくに兄さんには。ガチで闘うつてい

うのならせめて僕や他の祓魔師が揃つてからで、頼むからと言いたい。

「……」

聞いているのだろうか。つけダレの応用メニューとかおいしい出汁のひきかたよりも気にして欲しいところなんだけど、後ろ姿では兄さんの内側は見えない。

「備えておくのど越したことはないけれど」

光が当たれば影が出来ると同じく、森羅万象、この世に存在するすべてのものに物質界を侵す魔は潜む。幾百という歴史があつても、人間は悪魔について知り尽くしたわけではない、対処の方策と技を覚え、その精度を上げていつただけだ。

——守るために。

「攻撃してくるようなら逃げるのが上策です」

「はい」

しえみさんは神妙な顔でこくりと頷いた。

「ビビリが」

どっこい、鼻で嗤う声にする。

「は？」

「鳥の悪魔なんているのかよ」

「奥村くん、授業はちゃんと聞いてください」

有翼の悪魔はわんさどいる。ほんとうに胃が痛い。

「いるよ。悪い方の天狗に、えつと……」

「悪い方つてなんだよ」

僕もそうは思うけど、覚える気のない兄さんがいうことじゃないよね。と気持ちの中で尻尾を捻る。

「ガーゴイル……」

「も、そうですね。悪魔が憑依できなかった鳥というのも聞いたことがあります」

日本でも古来から鳥は神に近いもの、とされてきた。養父である藤本獅郎神父から教えて貰ったのは北の地で主の遺言を守り、戦い続けた鷹の話だった、子供心にすごいなと思ったものだ。神使とされる動物なのだから一度はそんな殊勝な猛禽と会ってみたかった（祓魔師になってそんなのは夢に近いことなのだと思いますわけど）。

「へー」

「僕が頼むからとでも言わないと覚えないんですか？ 兄さん」

笑顔で返すとかちんときたのか、途端に肩がかちんとなった。効果があつて何よりだ。

小さい頃、僕は身体も心も弱かった。兄さんは後先考えず突っ走ってきては、僕を守った。やり過ぎることは多かつたけど。

「ただいま」

醬油を買いに行つて、一時間後の兄さんの帰宅はとても機嫌が悪い。待ちかねていたクロが話しかけるように兄さんの近くに寄っていく。

「なんだよ、せっかくのブツだろ、いいから食つてればよかつたのに」
足下のクロはそれでは意味がないのだとばかりににやあと返す、悪魔同志(?)なので兄さんとクロは意思の疎通ができる。

「……。おかえり」

「どっか行くのか？」

通話が切れた携帯を仕舞い、コートに手を伸ばしかけたところで気が付く、兄さんは頭から水滴をばたばたと濡らしていた。

「え。雨？」困ったなあ。

昼間は晴れていたし、窓に半月状の月も見えていたのに何時の間に傘を差しながら二挺の銃は持てない、それに僕の眼鏡にワイパーはない。土砂降りだと装備も変わってくるけど、少々の雨というのはちよつとやりにくい。

「どっか行くのかつて聞いてんだよ！」

「任務」

「……」

雑に髪を拭きながらやつぱり不機嫌だ、『どうしたの』が後になって申し訳ないけど僕も忙しい。

「兄さんはごはん食べてないし、授業の課題も手つかずだし、僕は行くけど……」後のことは頼んでおいたから。

「俺も行く」

「でも濡れてるし」また濡れたらいくらなんでも兄さんでも少しは風邪っぽくなるんじゃないのか。

「別に雨じゃねえし」

頭にタオルを被つたまま掛けてあつた制服を掴む、物言いたげに見上げるクロを見て、怒るでもなくお前は留守番だからな、と諭すように言っていた（急遽醬油を買いに行くことになったのは、刺身というおかずに喜んだクロが台から落としてしまったからで、反省のため兄さんの買い物にも付き合っていない）。

「いや、兄さんは試験に向けて課題やって」

「いやいや」

「いやいやじゃなくて」あれ僕が厳選した問題なんだから。

「遠慮するなよ」

「違う」

兄弟で足並み揃えながら話すことじゃないけど、僕が動く同じスピードで兄さんもついてくる。試験まで間がないというのにこの根拠のない余裕っぷりが流石にちょっとイラツとした。ていうか、機嫌悪いときは来いって言っても来ないのに。来るはずなかったのに。

「だから勉強しろって！」

「うん」

「ばたん。」

雨はないけど、夜に包まれた森だった。

通じていたのは道路に面したロッジ風の建物のドアで、開ければうっそりと暗い。道路は一車線ずつのガードレールもない山までまっしぐらという一本道で、そこだけにぼちぼちと明かりが灯っていた。…がため攻撃するかのように虫がたかっている。掲げている道路標識は一部が枝に隠されていて、甲府市は不明、大月市五〇キロ、とおぼろげに読めるだけだ。さながら冥界への道標といったように。

「……」

魍魎ワウリョウがつう、と目の前を通り抜ける。

「便利鍵ってすげーなあ。奥多摩からこれナシで正十文学園に戻るってのはちょっとなあ……」

「それでも帰れ」

眼鏡を押し上げながらぼやっとした光を放っている場所に向かってを山道を進む、祓魔師達の応戦している独特の色をした光が消えたり光ったりしていた。小物も多い、苦戦しているようだ。

「わっ！」

強い風が吹き、鋭い鳴き声が出た。

「すげ……って、雪男！」

こうなったらとっとと終わらせて帰ろう。

「急ぐから手短かに言うけど、悪魔が凶暴化したそうさ。素人が召喚した使い魔だからクワとは違うよ、主を殺して暴走している。兄さんは何もしないでいいから」

「……」

とついで走りながらも不服そうな顔。

「そこで髪拭いてて」

「っ！ 奥村くん！」

駐車場らしい開けた場所に着くと、何度か会ったことがある祓魔師がやって来た。攻撃された車体の傷が鈍く光っている、建物の明かりが消えて、辺りにはけもの血の臭いと火薬の匂いがした。詠唱の声が聞こえる、新たな被害者が二人、倒れて手当をされているが問題の使い魔の姿がない。

血の臭いに誘われた魔が寄っては祓われていた、瘴気が濃いわけはないが場所が場所だけに数が多い。

「……」地面を見る。

「雪男？」

「何でもない」

火は焚かれず、車のライトだけで明かりには乏しいが、幸いに月明かりがある。円を描くだけで精一杯だったのだろう、湿った土を触ってから進んだ。兄さんに刺さされる冷たい視線に気付いたけど敢えて無視する。